

栗田谷中学校

目次

集中への配慮 人間科学部 4 年
ATをはじめて学んだこと 経済学科 4 年 岩崎 寛之
スタイル・カラー 人間学科 3 年 小林 祐子
新たな悩み 英語英文学科 3 年 滝沢 栞菜
ATを始めて 人間科学部 2 年 田井中 舞歌
ATの立場だからこそ得られるもの 経済学科 2 年 本田 彩未
A Tをはじめて 法律学科 1 年 井倉 真昼
AT活動から感じたこと 人間科学部 1 年 高橋 菜奈

集中への配慮

人間科学部 4 年 矢島 芽以

栗田谷中に A T（アシスタントティーチャー）として行きはじめて 3 年が経ちました。個別支援学級に新しく増えた 4 人の新入生も学校に慣れ、少し生活に余裕も出てきたように感じます。しかし、余裕が出てきたからこそ発生する問題もあるようです。今回はそのような日々で学んだことを書きたいと思います。

学校は、授業と休憩時間の繰り返しです。その休憩時間で生徒は自分の特技を先生や友達に披露していたり、読みたい本を読んでいたたり、友達とお話ししていたりとその生徒の持ち味が発揮される時間を過ごしています。楽しく過ごしたあとは授業ですが、最近授業が始まった直後にその授業の準備を始めたり、授業に集中できなくなったりしている生徒をよく見かけるようになりました。授業の準備は声掛けをすることで改善していきましたが、特に、ある生徒は自分の集中が切れてしまうとその生徒が好きなこだわり行動に多く時間を割いてしまい、勉強の思考から離れてしまいます。そのような時の対処として、担任の先生に言われたことが「全てを禁止にしない」ということです。いくら授業中だからといってそういったこだわり行動を全て禁止にしてしまうと、生徒はこだわり行動のことで頭がいっぱいになり、なおさらその行動をしなくなってしまうのです。つまり、結局は勉強に手がつかなくなってしまうということです。こだわり行動をやめるよう逐一伝えるのではなく、少しこだわり行動の時間を設け少しでも気が晴れてから集中させることや、休憩時間は禁止にせず好きなことをのびのびとやらせることが結果として授業の集中につながるということでした。確かにその授業の前の休み時間にその生徒のこだわり行動を注意してしまった後は、今振り返ると次の授業になかなか集中できていなかったように思います。

この件からのびのびと生徒が過ごせる休憩時間をきちんととってから、次の行動に移ることが授業をしっかり受けられる状態にできることがわかりました。そして「授業をしっかり受けられる」状態に生徒の気持ちをもっていけるように、私たちは色々配慮をしていかなければならないと感じました。もちろん今回のこだわり行動を全て禁止にしないことだけでは配慮として足りません。黒板回りの掲示物を貼らないといった環境整備や、得意な分野を褒め自信をつけるような精神的配慮などできることは様々あります。先

生にできる創意工夫が結果として知識の定着や日々の生活、最終的には生徒への自立へつながっていくと感じます。

私のATとしての活動は3月で終わりです。今生徒と一緒にいられる時間を大切に、少しでも多くのことを生徒から学び自分の力としていきたいです。

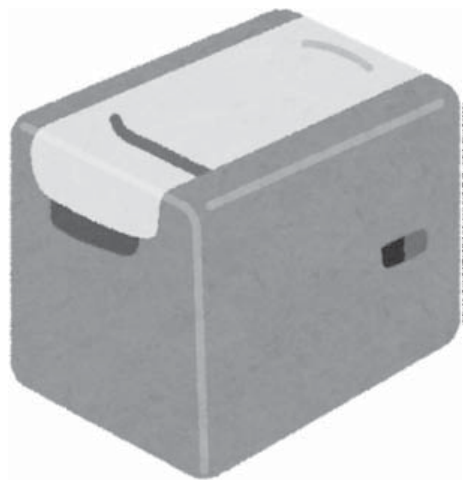
ATをはじめて学んだこと

経済学科4年 岩崎 寛之

私は4年生の11月から、栗田谷中学校のアシスタントティーチャーとして学校ボランティアの活動を始めました。周りの方と比べて遅いですが、来年度に控えている教育実習に向けて少しでも学校現場の雰囲気や中学校の生徒の様子を学びたいと思い始めることに決めました。アシスタントティーチャーとしての活動内容は主に授業補助です。先生の話聞くことができない生徒には横につき『前を向いた方がいいよ。先生の話聞かないとだめだよ。』と言うようにしています。また、課題に取り組めない生徒には、まず鉛筆を持つように声掛けをしています。その他にも音楽の時間には私も生徒と一緒に歌い、歌うことは素晴らしいことだと思える環境を作るように工夫したり、学活の時間には生徒と一緒に課題を取り組んだりしています。そのなかで学んだことが二つあります。一つは、生徒と信頼関係を築くことによって、私の話や指示を聞いてくれるということです。私は、休み時間は常に生徒と関わるように意識し廊下に立っていたり、屋上の日向で休んでいる生徒のところに顔を出したり、次の授業の教室にいるようにしたりしています。そこで生徒とたくさん会話をすることで、私と生徒の信頼関係が築けていくと考えています。また、生徒と接するときには表情を大切にしています。つまり、笑顔で話すように意識しています。私が笑顔で接し、生徒の笑顔を引き出すことができるようにしたいと思います。もう一つは、何かの係を決めることは難しいということです。ある日、家庭科の時間に調理実習の作業分担を決める授業の補助をしました。その時に、後片付け係を決めることになりました。そこで、後片付け係をやりたいくない生徒と今まで嫌でもやってきた生徒とで言い合いになってしまいました。後片付け係はすべて一人で

行うのではなく、片づけをするように指示を出す係でしたが、やりたくない生徒はやりたくないと言い張っていました。私も話し合いに参加しましたが、それぞれの生徒にとって後片付けは嫌なものというイメージが強いみたいでした。班での話し合いの結果、誰かが後片付け係をやるのではなくみんなで協力して行うことに決めました。このことから、係を決めることや何かの決め事を行うことはとても難しく感じました。また、対立から合意までの過程になるべく多くの生徒が気持ちよい状態で終えることができるように配慮しなくてはいけないことも学びました。

これからもアシスタントティーチャーとして、多くの生徒と関わり、多くのことを学び、教育実習に向けて良い準備や良い経験をしていきたいと思っています。



スタイル・カラー

人間科学科3年 小林 祐子

ATに参加してから半年が経とうとしています。8、9月は自分自身の部活動やインターンシップの関係で、休みをいただいていたため、夏休み中の生徒の部活動の様子や、学期初めの時期の生徒やクラスの様子などを見ることはできず、ATに入らなかったことを後悔しています。しかし、後期は生徒たちにも少しずつ名前を覚えてもらえたり、話しかけてもらえたりなど、生徒との距離がほんのちょっと縮まった気がします。

ATをしていて驚いたことがあります。それはある日の体育実技の授業の際、生徒たちはチャイムが鳴る前に自分たちで整列をして、準備運動を始めたことです。また、授業も先生と生徒のやり取りが多く、準備や後片付けも積極的に行い、男女が一緒に活動する機会もありました。生徒たちは技能の差はあっても、やる気は皆同じくらい感じられます。感心して体育科の先生に生徒たちの普段の様子を聞いてみると、担任の先生の指導がよく、その先生のカラーに生徒たちが染まっているのだと言われました。このクラスの担任の先生が担当する教科の授業にも、時々ATとして入ることがありますが、たとえその先生のクラスの生徒でなくとも、どの生徒も授業に対して積極的に、楽しそうに授業を受けている姿が見受けられます。

注意の仕方の多様性も学ぶことができました。生徒が騒がしい際は、何度も注意するのではなく、「今は何の時間？」「今は先生が話すからあとからみんなに時間をあげます」というような声掛けをすることで、授業にメリハリが生まれます。さらには、生徒たちの学習時間もしっかり確保され、クラスにまとまりが感じられます。教師の指導スタイルはクラスだけでなく、教科にも影響することがわかり、いかに生徒たちを指導していくのか、引き続き先生方と生徒たちを観察していきたいと思います。

10月の半ばくらいから、大学の講義で気になったことも意識してATの活動に臨んでいます。それは、できない生徒ややる気のない生徒への教師や生徒たちの働きかけです。保健体育はそういった差が一番表れやすい教科だと思います。頑張っている生徒ややる気のある生徒は目に付きやすく、

教師側も積極的に指導していこうと関わるため、保健体育の授業に“積極的に取り組んでいない”生徒には、目が行きにくいところがあります。そのため自分が思っている対応方法と現場の先生や生徒たちの対応方法の違いから、よりよいかかわり合いを学んで生きたいと思います。

新たな悩み

英語英文学科3年 滝沢 葉菜

栗田谷中学校でATを始めてからもうすぐ1年になります。始めたころはどうしたらよいか分からず、何のためにATをしているのかと疑問に思ってしまうこともありましたが、今は将来のための勉強として、目標を持って取り組めるようになりました。以前よりも心にゆとりが持てるようになったので、生徒の名前や顔も少しずつ覚えることができています。また、以前は生徒にあまり存在を認識されていなかったのですが、最近は生徒から話しかけられるようになり、とてもうれしく感じています。ATをするなかで私が1番悩んだことが生徒とどうコミュニケーションを取るかということでした。内気な性格のためになかなか自分から話しかけることができず、また話しかけることができたとしても話を広げるということができなかったため、歯がゆさを感じていました。そのようなときに、生徒から話しかけてもらえたことがとても嬉しかったです。生徒と関わるのが好きだと再認識できた瞬間でした。

しかし、今は別の悩みがあります。それは生徒の集中を授業に向けることができないことです。ATとして授業補助をする際に、授業中に分からない部分がある生徒へのサポートだけでなく、集中力が切れてしまっている生徒への声掛けも行うのですが、うまく授業に集中させることができていません。寝ている生徒に対して「あと〇分だから頑張ろう」と私なりに声掛けはするものの、生徒の授業態度が改善することではなく、再度先生に注意をしていただくことになってしまいます。私自身、生徒に「うざい先生」と思われることを怖がっていることもあり、はっきりと注意することができていないのも原因だと思います。

今はATという立場ですが、将来教員になった際

に、どのような声掛けが効果的なのか、どのような声掛けをすると生徒が反発してしまうのか知っておくことが大切だと思います。授業補助として中学校へ行っているため、授業が円滑に進むように先生方の行動や言葉を観察したり先生方へ質問したりしながら、声掛けの仕方を学んでいこうと思います。

今までは生徒とのコミュニケーションばかりに気を取られていたのですが、生徒とのコミュニケーションも大切にしながら、これからは先生方の動きや生徒への声のかけ方、また、授業運営についても学んでいきたいです。

ATを始めて

人間科学部2年 田井中 舞歌

今年度の10月から、栗田谷中学校で保健体育科のATとして活動を始めました。1年生の頃から友人がやっていたので、存在は知っていましたが、勇気が出なかったり、時間割や部活動の関係で時間が確保でなかったりして、2年の後期からの活動となりました。

同じ保健体育の教職を目指す友人が、私にATの活動をよく話してくれました。その話は、とても魅力的なもので、学校現場や生徒の実態を知ることができました。しかし「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、友人から話は聞いても、実際に自分がATの活動をしないと見えてこないもの、体験できないものというのがあると感じました。経験値は何にも代えられない、その人の武器だと思います。もっと、教員に近づくための経験を積みたい、自分の目で確かめたいと思うようになり、ATの活動を始めました。

ATを始め、いきなり「先生！」と呼ばれることに、少々困惑しました。先生ではないけれど、先生と呼ばれる立場に責任を感じました。しかし、だからこそ週一回の活動に全力で打ち込めることができ、まだ少ない活動回数ではありますが、とても濃い水曜日の午前中を過ごしています。

その中で、私が主に見ているものは、教師の動きに対する生徒の反応です。先生が投げかけたことに対して、生徒はどのような反応をするのか、先生がどのようにコミュニケーションをとっているのかということなのです。まだまだ勉強中ではあ

りますが、ATの活動をしないとわからないことや見えないものがそこにはたくさんあり、始めて良かったと思います。自分なりに一生懸命コミュニケーションを取ろうとすると、生徒も徐々に声をかけてきてくれることはATの活動を通して気づいたことです。しかし、声をかけてくれることに困ることもあります。例えば、私の知らないことを授業の中で聞かれたときは、「どうやってバットを振るの?」「どうやってボールを投げるの?」などの技能面での質問は、具体的にアドバイスをすることができません。自分ができることをでも人に教えることは、こんなにも難しいことだと気づきました。

今後、教員を目指す自分の課題は、生徒とのコミュニケーション能力の向上、技能面での指導力の向上です。これは教師行動の中でも最も学んでいきたいことです。まだまだ足りないものはたくさんありますが、夢の教員になれるようにATの活動と大学での学習をこれからも頑張っていきたいと思っています。

ATの立場だからこそ得られるもの

経済学科2年 本田 彩未

2年生後期になって、再びATとして栗田谷中学校にボランティアで行かせていただいています。私は1年生後期にも行かせていただいていた。当時は、ATとして自分自身満足のいく活動ができなかったという苦い思いが今もなお残っています。しかし今一度学校現場を間近で見たいという念から、再びボランティア活動を行うことを決めました。

私自身実際に現場を見てみて考えたこと、思ったことなどたくさんあります。例えば、実習の時間などでは普段の授業以上に生徒の生き生きとした姿を見ることができます。また、現場の先生方を目の前にして見ることができます。工夫されている所や苦労されている所など、自分が将来教員となったら考えていかなければならないようなことが手に取るように分かります。このように、ボランティアを行うことにより日々新たな発見があります。そして思うのが、やはり私も教員になりたいということです。

ある時、社会科の先生が声をかけてくださいました。「君は社会科の先生を目指しているのか」と。私は「そうです」と返答しました。「社会は知識じゃないんだよ。なぜを理解できないと社会を嫌いになる」と先生はアドバイスをしてくださいました。この時とても感動しました。私は、社会の授業の根源を教わった気がしてならなかったのです。当時、大学の授業で模擬授業をしても何かしっくりこない上に、どこをどうすれば良い授業になるのか暗中模索の状態でした。だから先生の言葉はとても胸に響き、暗闇の壁を乗り越えられたきっかけにもなりました。先生と呼ばれる職業は、こうやって人を導いていくものなのだと改めて実感できました。

ATという立場は生徒から見れば先生に近い存在です。だから、私たちが生徒たちを正しい方向に導いていく必要は大いにあるのではないのでしょうか。生徒と一緒に学び、先生と共に指導していくのがATの意義だと思います。この貴重な機会を最大限に生かせるように、毎回のボランティア活動に臨みたいと思います。

ボランティア活動は、以前よりも数段楽しいものになっています。様々な授業を見せていただき、様々な先生の指導の仕方が見られることによってとても勉強になっています。生徒が楽しめるようにクイズ形式で授業を進めていたり、分かりやすいように先生が演じて表現したり、先生各々が工夫を凝らしていました。私が生徒だったらこんな授業を受けたいと思えるような授業づくりをしていく必要があると思います。私自身、このボランティア経験を大切にし、これからも積極的に行っていきたいと強く思います。

ATをはじめて

法律学科1年 井倉 真屋

私は週に1度、水曜日の午前中に栗田谷中学校でATとして活動しています。9月の教育と社会の講義の際に、既にATを始めている先輩方が来てくださり、ATのお話を受けました。サークルや部活動をしていない私は、「これだ!」と思い、「先生になりたい」という気持ちを改めて膨らませながら、先月からATを始めました。まだ、ATを始めてから1か月程しか経っていないため、毎週の活動日には少し緊張しながら通っ

ています。

私は、最初の活動日にはとても意気込んで栗田谷中学校へ向かいしました。しかし、いざ生徒としてではない立場で門を通り、“今”の学校現場の中に入ってみると少し前までの意気込みは一瞬にして消えてしまいました。実際に通学している沢山の中学生を見て、これから生徒たちとコミュニケーションをとり、深く交流を持てるようになるのか、朝の職員会議に参加して、先生方の授業の補助にうまくつけるかどうかという不安の気持ちに変わりました。そして、教室では授業中にただ後ろにずっと立っているだけでした。

活動が終わり、自分が授業中に書いていた活動記録を見てみると、記録の量は少なく、内容はとても薄いものでした。その日の朝までATができることをとても楽しみに意気込んでいたため、活動中の自分にとっても失望しました。それでも、「将来中学校の先生になりたい」という気持ちだけは変わりませんでした。それから、活動記録が充実していないということは、自分の活動が充実していない、生徒と積極的に関わりをもたないからだということに気づき、次回からは少しずつでも積極的に生徒に向き合っていこうと決めました。月に1度行われるボランティア演習の授業では、経験豊富な先輩方にこのことを相談し、先輩方も最初はそうであったこと、些細なことでも積極的に生徒たちに話しかけていくことなど、励ましの言葉とアドバイスをいただき、積極的になろうと改めて思うことができました。

まだ、数えられる程度しか活動をしていませんが、活動記録や活動中の自分の姿を振り返ってみると、少なくとも1回目、2回目の自分よりは成長できていると思います。せっかく1年生という早い時期からATの活動に参加させていただいているからには、自ら積極的に行動をして生徒や先生の動きから色々なことを学び、これからのATの活動1回1回を大切にしていきたいと思っています。



AT活動から感じたこと

人間科学部1年 高橋 菜奈

私は今年の10月から栗田谷中学校で学校ボランティアをさせてもらっている。人生で初めて公立中学校に行ったため、ほかの学校と比較することもできないが、思っていたよりも教室や職員室の中の雰囲気は活気があり、また先生と生徒の距離も若手の先生が多いため良い意味で垣根がないように感じる。

アシスタントとして入る授業は体育・理科・音楽・数学など様々だが、たいがい決まったあるクラスの担当をさせてもらっている。そのクラスには学習障害の生徒や多動傾向のある生徒がいて、一部の生徒にみられる授業中の私語、立ち歩き、ノートを取らないという点に各教科の先生方も四苦八苦しているようである。そのためクラスに入るときは大抵はそうした生徒につきっきりで見られるようにいわれるのだが、なかなか対応が難しい部分も多い。

実際先生方に話を伺うと、中心的生徒に他の生徒よりも注意を置くことはあるが、過剰にマークすることは必要ないとおっしゃる先生もいる。そういった先生の授業は特定の生徒に焦点を絞り、あからさまに声かけをするのではなく、クラス全体を見回す中で他の生徒よりも少し丁寧に対応するという形をとっていた。それによって他の生徒も注意されている生徒に気をとられることが減り授業に集中しており、また特定の生徒たちも周りから注目を受けずに自分を落ち着かせる時間ができていたため、クラスが全体的に落ち着いた雰囲気

気になっているように感じた。

同じクラスでも先生によって、また時間割によってクラスが全く異なった形相をみせるということを毎回実感する。対応の方法に決まった正解はないが、生徒たちが自然と教科に興味を持つ雰囲気づくりを先生方から多く学び取りたい。

一部の生徒によって授業の進行が遅れることは、解消しなくてはいけない問題である。しかし、そのことばかり考えて無意識のうちに、その他の生徒を無視する状況に陥ってしまうかもしれない。問題を解決しようと近づきすぎると問題の一部分ばかりに気をとられ、その問題と全体とのバランスが本来どのようになっているのか分からなくなり、クラスの自然なあり方を見失ってしまう恐れがある。将来教員になって様々な問題に直面した際、生徒たちの可能性を摘まないためにも、ATでの実地活動を通して先生の本来の役割を模索していきたいと強く感じた。



発行日:2016年2月27日

発行場所:神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL:045-481-5661(内線4352)

FAX:045-413-4154

E-mail:jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp